

『常陸国風土記』の漫画化

Visualization of the 『Hitachinokunihudoki』

駒村尚紀
指導教員 小出昌二

拓殖大学 工学部 デザイン学科 視覚デザイン研究室

キーワード：風土記，漫画，

1. 緒言

日本には『出雲国風土記』『播磨国風土記』『備前国風土記』『豊後国風土記』『常陸国風土記』という5つの古風土記の写本が現存する。これらの風土記はその土地の風俗や神話などを編纂し天皇に献上した報告書であり、いずれも奈良時代に成立した。この5つの中で『常陸国風土記』は現在の茨城県の風土記であり唯一東国に位置するため民俗学研究では注目されている。さらに、教養的なレベルの高い漢文、和歌を取り入れた文学的色調の強い書で風土記の入門には最適と紹介されている。風土記は土地の歴史や言い伝えが記載されているため史料としての価値が高い。実際に『出雲国風土記』はヤマトタケルがヤマタノオロチを退治する神話によって囁きされることが多い。しかし『常陸国風土記』は『出雲国風土記』ほど有名でもなければ古書としては同時期の『古事記』や『日本書紀』ほど膾炙されてもいない。

三浦裕之は著書、『風土記の世界』にて風土記全般を指して「貴重な資料でありながら、読むためのテキストも注釈書や解説書・入門書の類も本当に少ない。」と記している（引用文献1 Kindle No. 34）。これらの風土記が文章のみの古書で、敷居を高く感じることにその一因があると思われる。そこで「入門に最適」な『常陸国風土記』の文章部分を漫画化し読みやすくかつ入門しやすくすることを提案した。

2. 方法

視覚化のメディアとして漫画を選択した理由に

家島明彦の論文を引用する。「漫画の特殊性は主として次の4点にまとめることができると考えられる。（中略）それぞれ『表現性（可視・可読性）』『大衆性』『易読性』『空想性』と呼ぶことができるだろう。」（引用文献2）つまり、風土記のような土地習俗や人々の暮らしを描出し報告することが目的の書物は漫画の「表現性」「易読性」が有用になるとえた。さらに『常陸国風土記』では超現実的な神々や幻想的な風景の記述が見受けられ「表現性」「空想性」の面でも漫画の特殊性が最適だと判断した。

また、「可視性」「易読性」を鑑みてエンドユーザーに想定したのは「専門的知識を有していない」「活字は読まないが漫画を読む」人物である。

原本として秋本吉徳の『常陸国風土記全訳注』を使用した。この文庫本は原文（漢文）の訓下しの後に現代語訳と注釈が付されている。この注釈は他の書物との関連や考察など、ある程度専門的な内容も扱っているが適宜漫画の中に取り入れた。これは風土記の研究が記紀や別の風土記と不可分であり、描写すべき古代日本の世界観にも関わってくると考えたためである。

残存の写本は綴じ本だが風土記の成立当時は巻子本（巻物）と木簡が主流であり、この『常陸国風土記』はもともと巻物だったと予想される。巻物のように横に長く紙面がさける場合、漫画のような視覚メディアは迫力ある表現ができる。その効果が自然や超現実の演出に有利であり、風土記の世界観に合致すると考え巻物形式の漫画を制作

した。また絵巻物と違い、コマ割りの視線誘導をすることで易読性の確保も図った。

また『常陸国風土記』にはヤマトタケルをはじめ様々な天皇、夜刀神、庶民の生活の姿が描写される。それらを視覚化するにあたり、一般的に知られている人物像、顔貌および奈良時代の服装や暮らしを参考にした。姿形の画像が存在しないものについては記述から想像される姿を写した。当時「常陸国の人々の暮らしを記録する」報告書として使用、制作された本書だが現代では「昔（奈良時代）の人々の生活を視覚的にわかりやすく確認」できることを目指した。

3. 結果

『常陸国風土記』にたびたび登場するヤマトタケルは「ヤマトタケル」本人ではなく権力の象徴として登場するとみられていが、ここでは本人として扱った。ヤマトタケルは常陸国に限らず様々な土地に伝承を残しており、絵画や銅像など多く作られた（図1）。今回はそれらをもとに漫画向けにデザインした（図2）。



図1 上村松園画(引用文献3)



図2 デザインしたヤマトタケル

また巻物として描いた場合（図3）、綴じ本とし



図3 制作した巻物の一部

て描いた場合（図4）と見比べてみると風土記の特徴として挙げた大自然や独特の世界観が横長の画面の特性ゆえに効果的に表現することができた。



図4 縫じ本として描いた場合



図5 写本

4. 考察

風土記の視覚化および風土記の独特の世界観を再現する漫画の提案ができた。これによって多少興味のあった人も全く興味のなかった人も格段に読みやすく、入門しやすくなったと考える。また、単純な漫画化でなく巻物によって風土記の世界を満遍なく表現できた。現存の古風土記はごくわずかだが大いに価値ある書物であり、これからさらに研究が深化していくと思われる。この研究によって微力ながらその一助に、また風土記を身近に感じる人が少しでも増えれば幸甚の至りである。

引用・参考文献

- 1) 三浦裕之:風土記の世界, 岩波新書, 2016年
- 2) 家島明彦:心理学における漫画に関する研究の概観と展望, 京都大学大学院教育学研究科紀要(2007), 53:166-180
- 3) 大宮神社ホームページ(<http://goioomijinja.jp>)
- 4) 秋本吉徳, 常陸国風土記全訳注, 講談社, 2001年
- 5) 常陸国風土記, Kindle アーカイブ, 2015年

